

**「福耳落語」**

三宮麻由子／著 日本放送出版協会 2006年7月発行  
2階一般開架図書（請求記号：779.1）

最近、落語にはまっている。今日は3代目古今亭志ん朝の「柳田格之進」を聞きながら出勤。年寄りの人口密度の高い家に育ったためか、昔ながらのものが結構好きだが、これまで落語はなじみが薄かった。

『福耳落語』は、「笑点」の放送中に誕生した（本人曰く、それなりに笑いの神様から祝福していただいている）著者の、落語取材記である。外国語大好きで外資系通信社の仕事に就いたが、なぜか子どもの頃から落語に包まれ、家族の会話もシャレがとびかうというような暮らしで、すっかり落語好きに仕上がりに、ついに！という具合。

実は、著者・三宮麻由子さんは4歳のときに光とさよならしている。いつも「真面目な」「お勉強の」点訳本しか知らなかったのが、小学4年生のときに落語の点訳本をもらい、それが落語との本当の出会いになった。以来、「これで区内の図書館の落語資料は全部お貸ししました。」と3回（！）言われ、落語専用のラジカセを5台つぶし・・・というから筋金入り。本書も随所に落語好きのエキスが染み込み、顔をのぞかせている。

**「坊っちゃんの時代第4部 明治流星雨」**

関川夏央・谷口ジロー／著 双葉社 1995年発行  
2階一般書庫（閉架図書）（請求記号：726.1）

稀代の名文家、非戦論者、大逆事件の悲劇の論客・・・。幸徳秋水が自身の思想のために命を奪われた偉大な言論人であることは間違いないんだけど、いかにも近寄りがたい孤高の人の印象も否めない。

漱石、鷗外、啄木など、明治の文人たちの姿を通して明治日本を描くシリーズ漫画の第4部である本書では、秋水を中心とした大逆事件前後の血気に満ちた若者たちに焦点が当てられる。大逆事件という得体の知れない化け物が、意図的な物事のすり替えや、不幸な偶然の重なりによって、いかに生まれていったか、そしてその巨大な力に、秋水らがいかに絡め取られていったかが、淡々と描かれる。一方で、秋水の人間臭さや弱さ、ユーモラスな一面がわかりやすく描かれ、孤高の人だった秋水が実に身近なおじさんのように思えてくる。

そんな風に思えてきたら、本書のネタ本でもある伊藤整の「日本文壇史第16巻 大逆事件前後」もぜひ一読をお勧めする。また、秋水の郷里中村では、近年地元の有志の方々によって「現代に生きる幸徳秋水」が出版された。

ところで、井上陽水の名前は秋水に因んでいるという豆知識は、ホントなんだろうか？

**「日本文壇史第16巻 大逆事件前後」** 伊藤整著（講談社 1972）

（910.26-N）一般書庫

**「現代に生きる幸徳秋水」** 谷口平八郎ほか編（幸徳秋水を顕彰する会 2007）

（K289-コウ）2階郷土資料コーナー